

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：37304

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21720145

研究課題名（和文） モンゴル語のテンス・アスペクトについての通時的研究

研究課題名（英文）

The diachronic study of tense and aspect in Mongolian

研究代表者

松岡 雄太 (MATSUOKA YUTA)

長崎外国語大学・外国語学部・講師

研究者番号：40526688

研究成果の概要（和文）：

本研究はモンゴル語におけるテンス・アスペクトの通時的変遷を明らかにするための基礎的な調査研究である。本研究では、言語の通時的変遷を明らかにする際に通常とられる過去の文献を調査するという手法に加えて、現代語の諸方言を記述し、その異同を明らかにすることによって、通時的変遷の痕跡を探った。その結果、いくつかのアスペクト形式において方言差と個人差が確認された。これらは専ら補助動詞の文法化の差を反映していると結論づけられるものである。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this work is to investigate a diachronic change of tense and aspect in Mongolian. To realize this aim, I not only make an analysis of documents written in past times, but also describe the modern Mongolian dialects, Khalkha Khorchin Chakhar and Kharachin. As a result, I could confirm some differences in the aspectual form between the dialects above. I concluded that these differences reflect a process of grammaticalization from the verb to the auxiliary verb as the aspect marker.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、言語学

キーワード：モンゴル語・テンス・アスペクト・言語接触・文法化

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来、モンゴル語における「テンス」（日本語の「スル」と「シタ」の違いに相当する形式によって構成される文法カテゴリ）と「アスペクト」（日本語の「スル」と「シテイル」の違いに相当する形式によって構成さ

れる文法カテゴリ）の研究は、各形式の意味を記述する断片的なものに留まり、包括的、体系的な研究はなかった。特に、アスペクトについては、多くの研究者が、日本語の「シテイル」に相当する「-j baix」形をアスペクト形式とし、その意味を「進行」などと記述

するに留まっていた。しかし、「j baix」形の意味を正確に把握するためには、「j」と同様の副動詞（日本語の連用形に相当する）「-aad」、「-saar」と「baix」（日本語の「いる・ある」に相当する）の構成からなる「-aad baix」形と「-saar baix」形も同時に記述し、その相互関係から、全体の体系を明らかにする必要がある。また、アスペクト形式は、多くの言語において、共起する動詞によってその意味が変化することが報告されている。そのため、アスペクト形式の意味を明らかにするには、共起する動詞を包括的に記述する必要がある。報告者は、このような従来のモンゴル語のアスペクト研究に対して、2008年に提出した自身の博士論文「モンゴル語のアスペクトに関する研究—満洲語と朝鮮語との対照研究」において、上述の問題点を解決するとともに、「副動詞+baix」の構成からなるモンゴル語のアスペクト体系を明らかにした。しかし一方で、モンゴル語には「副動詞+baix」以外にもさまざまなアスペクト的な意味を表す形式が存在する。上述の博士論文ではそれらを包括的に扱うことができていなかった。

(2) 現代語における記述の妥当性は、現代語に至るまでの通時的変遷を明らかにすることによって高められる。言語の通時的変遷を明らかにするには、一般的に過去の文献を用いて、そこに現れる言語を記述するという方法が取られる。モンゴル語の時代区分は研究者によってさまざまであるが、報告者は、古代語（13世紀以前）、前期中世語（13世紀から15世紀前半）、後期中世語（15世紀後半から17世紀中葉）、近代語（17世紀中葉から20世紀初頭）、現代語（20世紀初頭以降）に分ける。報告者は上述の博士論文において、前期中世語の文献である『元朝秘史』を用いて、前期中世語のテンス・アスペクト体系を記述し、それを現代語と比較するというを行なった。その結果、前期中世語と現代語の間に異同があることが明らかになった。しかし、モンゴル語の場合、前期中世語と現代語の間に位置する後期中世語の時期に、文語が成立したことから、後期中世語と近代語の口語文献が圧倒的に不足しており、それに伴って、その考察に用いるデータが不足していた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、「副動詞+baix」以外のアスペクト形式を記述することで、現代モンゴル語におけるテンス・アスペクト体系の全体像を明らかにすることである。第二に、モンゴル語のテンス・アスペクト体系が、中世語から現代語に至るまで、どのような過程を経て変化してきたのか、その通時的変遷を

明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究を遂行するにあたって、以下の三つの方法を取った。総じてモンゴル語の通時的変遷を多角的な視点から明らかにしようとするものである。

(1) 本研究では、第一に、前期中世語から現代語の間に位置する後期中世語と近代語の口語データを充実させることによって、モンゴル語におけるテンス・アスペクトの通時的変遷を明らかにするという方法を取った。本研究では、後期中世語の文献として、近年、中国で影印本が出版されつつある17世紀前半に書かれた「档案」（書簡、行政文書）に注目した。近代語の文献としては、18世紀の朝鮮時代に朝鮮司訳院（周辺諸国の言語教育機関）で編纂されたモンゴル語の教材に注目し、その再検討も行なった。

(2) 本研究では、第二に、言語の通時的変遷を明らかにするにあたり、過去の文献を用いた調査の他に、現代語の諸方言を記述し、方言差の中から歴史的変遷の痕跡を探る方法を取った。モンゴル語にも他の言語と同様に多くの方言がある。モンゴル語の方言は、モンゴル国の共通語であるハルハ方言をはじめ、中国の内蒙古自治区ではチャハル方言、ホルチン方言、ハラチン方言、オイラート方言、ダグル方言などが話されている。報告者は上述の博士論文において、内蒙古自治区東部で話されているホルチン方言のみを研究対象にしていたが、本研究ではホルチン方言に加えて、上述のモンゴル語諸方言のうち、ハルハ方言、チャハル方言、ハラチン方言を対象とし、これら四方言間の異同を明らかにした。今回は、上記の四方言を対象にデータを収集し、そのデータをもとに残る方言を調査していけるようにするための足掛かりとする。

(3) 本研究では、第三に、モンゴル語を研究するにあたり、類型論的にモンゴル語と同型の膠着語に属する日本語、朝鮮語、満洲語といった東アジア諸言語も調査し、これらの言語とモンゴル語を対照するという方法を取った。類型論的な考察は記述の妥当性を高めるものとして期待される。中でも満洲語は、系統論的にもモンゴル語と同系とされ、さらに中国の清朝時代(1644~1911)を通じて、モンゴル語と言語接触の関係にあったとされる言語である。それゆえ、モンゴル語の通時的変遷を明らかにするにあたって、モンゴル語と満洲語と対照することは、言語接触の観点からも非常に有効だと考える。

4. 研究成果

本研究の成果は主に以下の3点に集約される。

(1) モンゴル語の諸方言におけるテンス・アスペクトの調査

① 現代モンゴル語のホルチン方言におけるアスペクトは「副動詞+baix」の形式によって表される。本研究では、第一に、ホルチン方言に加えて、ハルハ方言、チャハル方言、ハラチン方言を対象に、「副動詞+baix」形に相当するテンス・アスペクト形式を記述した。その結果、「-aad baix」形がハルハ方言と内モン古諸方言の間で若干異なる振る舞いを見せることがわかったが、全体的には、発音に若干違いがあるものの、意味や用法に大きな違いは見られないことが確認された。このことは「副動詞+baix」形がアスペクト形式としてかなり文法化していることを示唆するものである。今後、今回は研究対象としていないダグル方言やオイラト方言などの「副動詞+baix」形がどのように使われているのかを明らかにした上で、結論を出したいと考えている。

② 一方で、モンゴル語にはまた、アスペクト範疇を構成するに至っていないが、「副動詞+baix」形と同様に、アスペクト的な意味を表す形式がある。本研究では、ホルチン方言を対象に、そのうちの一つである「-j suux」形（日本語の「シテアル」に相当するか？）の調査を行なった。その結果、「-j suux」の意味解釈には個人差があることが分かった。本動詞としての「suux」は「座る、住む、暮らす」といった意味であるが、「-j suux」形にしたときに、本動詞としての意味がどこまで残るかが話者によって異なるのである（学会発表①）。これは「suux」がアスペクトの意味を表す補助動詞として文法化する途上にあることを示唆するものであり、同時に、補助動詞の間で文法化の程度に差があること、つまり、「baix」は文法化がかなり進んでいる一方で「suux」はまだ文法化の過程にあることを示唆しているといえる。本研究によって、「suux」と同様に、補助動詞として記述される他の形式も調査していく必要があるという今後の研究の課題と方向性が明確になった。

(2) 後期中世語と近代語の文献調査

第二に、後期中世語の文献として、17世紀前半に書かれた档案を、近代語の文献として、18世紀の朝鮮司訳院で編纂されたモンゴル語教材を調査した。

① 档案

17世紀前半に書かれたモンゴル語の档案に関しては、従来、言語学的な観点からなされた研究がほぼ皆無の状態であったため、本研究ではまず、この档案を精査することで、後期中世語の資料として、言語学的にどの程度価値があるものなのかを考察した。その結果、第一に、これらの档案は、他の同時代の文献と同様に基本的に文語で書かれているものの、部分的に口語的表現が散見されることが明らかになった。第二に、この档案におけるモンゴル語の表記は、同時代の満洲語で書かれた档案と類似点が見られることが明らかになった（学会発表⑤）。また、現在はまだ公開できる段階に至っていないが、档案の内容をコンピュータで入力していく過程で、その一部をデータベース化することができた。

② 朝鮮司訳院のモンゴル語教材

18世紀の朝鮮司訳院で編纂されたモンゴル語教材には『捷解蒙語』、『蒙語老乞大』、『蒙語類解』の3種類がある。今回は、これらの文献のモンゴル語に付された朝鮮語訳の特徴について考察を行ない（雑誌論文③）、さらに『捷解蒙語』はその対訳テキストを作成することができた（雑誌論文②）。

(3) 満洲語の調査

第三に、清朝時代を通じてモンゴル語と言語接触の関係にあったとされる満洲語について調査を行なった。

① 満洲語のアスペクトの調査

満洲語のアスペクトは「副動詞+bi-」形によって表される。「bi-」は日本語の「いる・ある」に相当する動詞であり、その構成はモンゴル語の「副動詞+baix」と全く同じである。「bi-」の前に来てアスペクトの意味を表す満洲語の副動詞には「-me」、「-fi」、「-hai」の3種類があり、これもモンゴル語の「-j」、「-aad」、「-saar」と並行的である。だが、満洲語の場合、「-me bi-」の形が特徴的で、「-mbi-」という短縮形が現れる。本研究では、この非短縮形「-me bi-」と短縮形「-mbi-」の違いについて調査した。その結果、非短縮形と短縮形の間には使い分けがあり、両者が同時に使われる環境では、非短縮形に本動詞としての「bi-」の意味が残っている可能性が高いことが明らかになった（雑誌論文①、学会発表②）。これは上述したモンゴル語の「suux」と同様に、アスペクト形式として文法化する一過程を反映していると考えられる。

② 満洲語の文献調査

現在、口語としての満洲語はほぼ絶滅の危機にある。だが、満洲語には清朝時代を通じて

満洲語で書かれた膨大な量の文献が残っており、通常、満洲語はこれらの文献を通じた文語研究が中心となる。本研究では、このような満洲語文献のうち、従来、ほとんど注目されていなかった『清文鑑和解』、『翻訳満語纂編』という2種類の文献に着目した。これらは19世紀に長崎の唐通事によって編纂されたものであるが、本研究ではこのうち、『翻訳満語纂編』を対象に、その言語学的な価値について基礎的な調査を実施した。その結果、『翻訳満語纂編』の編纂過程と唐通事の満洲語能力がどのようなものであったのかが明らかになった(学会発表③、④)。また同時に、同文献のデータベースを作成することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 松岡雄太、満洲語の“-mbi-”と“-me bi-”、長崎外大論叢、査読有、15巻、2011、105-114
- ② 松岡雄太、『捷解蒙語』の対訳テキスト、福岡大学人文論叢、査読無、41巻2号、2009、835-861
- ③ 松岡雄太、司訳院蒙学書の朝鮮語、福岡大学人文論叢、査読無、41巻1号、2009、341-372

[学会発表] (計5件)

- ① 松岡雄太、モンゴル語の補助動詞 suu-について、ユーラシア言語文化コンソーシアム年次総会、2011年2月19日、京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター
- ② 松岡雄太、关于满语的“-mbi-”和“-me bi-”、“满学：历史与现状”国际学术研讨会、2010年8月30日、北京市社会科学院满学所
- ③ 松岡雄太、《翻訳満語纂編》의 <清文字頭国字对音>에 대하여、第2回訳学書学会国際学術会議、2010年8月12日、高麗大学校
- ④ 松岡雄太、長崎唐通事の満洲語について—満洲文字の表記と転写を中心に—、第25回満族史研究会大会、2010年5月29日、駒沢大学
- ⑤ Yuta MATSUOKA、Some Notes on the Mongol Documents of the first half of the 17th century、July 17 2009、Suncheon National University

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松岡 雄太 (MATSUOKA YUTA)
長崎外国語大学・外国語学部・講師
研究者番号：40526688

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：